

日本経済新聞夕刊 連載

あすへの話題 第二十一回

マクベス卿婦人

元世界銀行副総裁

シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー

西水美恵子

シエイクスピアが好きで機会があれば観劇するが、悲劇『マクベス』だけは残酷すぎて好まない。でも、血に染まった手の幻影に取り憑かれたマクベス卿婦人が両手を擦り続ける狂気の場面は、演技力の見せ所と固唾を呑む。「ここに血の臭いがまだ…。全てのアラビアの香水さえこの小さな手を甘く香らせぬ。ああ、ああ、ああ…。彼女の狂気は、心理学で衝動強迫観念という症状と教わっても、解せなかった。まさかこの自分が、マクベス卿婦人と似通う目に遭うとは、思いもしなかった。

世銀が内部統制システムを新しくした時のこと。システムを提供した会社も副総裁数人も、準備期間が短すぎてリスクが多いと指摘した。しかし、Y2K問題（2000年になる時コンピュータが00年を1900年と誤作動する問題）に対処する目的があるからと、聞き入れられなかった。案の定、施行1年目の決済で知らぬ間に組織全体が予算を大幅に超過していたと判明。経費をどう切り詰めても人員整理を要する悪状態だった。辞表を出したら君に責任はないと却下。思い直して、管理職の大幅減給を勧めたら「考慮する」のみ。「意気地なし！」とかんかんになり、我が経営チームに「逆境にも、探せばメリットはあるはず」と慰められる始末だった。そのメリットを求めて、チームと共にビジネス戦略を改訂。「元気に痩せよう」をモットーに、700人中、140人の整理を3カ月で終えた。転職、早期引退などのケアを充分にして、全員気持ちよく去ってくれたのは不幸中の幸いだった。

問題ある部下を解雇することに抵抗など感じないが、あの時は違った。辛かった。未だ、血に染まった我が手の夢を見る。

著者紹介

西水 美恵子（ にしみず みえこ ）

1975年、米ジョンズ・ホプキンス大学大学院博士課程修了後、プリンストン大学助教授（経済学）。80年に世界銀行入行。97年、南アジア地域担当副総裁に就任。2003年に退職。現在は独立行政法人経済産業研究所コンサルティングフェロー。07年に、シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー就任。著書に『貧困に立ち向かう仕事』。

著者へのご意見やご感想は、下記アドレスにお送りください。
個人メールアドレス nishimizu@sophiabank.co.jp

本稿は、西水美恵子氏が、二〇〇六年十一月二十五日付の日本経済新聞夕刊に、寄稿したものです。

著作権は、著者に帰属しますが、配布は自由に行っていただけます。